

# 情報リテラシーに及ぶ 情報教育の影響について

富 川 拓

## 要 旨

この研究ノートは情報リテラシーと情報教育について考察したものである。情報機器の重要性が、現代社会において増してきている。しかし情報機器の恩恵をうけるには、それらの機器をある程度使いこなす能力が必要となる。本を読むのに「リテラシー」が必要であるのと同様に、情報社会においては「情報リテラシー」が必要となってくるのである。この情報リテラシーを持つか持たないかにより、「情報格差」とよばれる問題も起こると考えられる。小論ではまず情報リテラシーを定義し、1998年に関西の大学生対象に行った調査結果をもとに、その度合に関わる要因としての情報教育に焦点を当てその影響について考察する。

キーワード：情報リテラシー 情報教育 情報格差 情報倫理

## 1 情報リテラシーとは

情報化、情報化社会の概念には非常に様々な定義がある。情報化とは広義には「社会環境全体の中で、情報あるいは情報環境の比重が増すこと」であり、狭義には「情報産業に従事する人間が増加すること」である。一般に情報化社会論において情報化は情報や知識が、それらにかかわる新しいテクノロジーとともに、きわめて重要な位置・役割を占めるようになることであるとされている。

情報化社会において、様々な電子メディアが生まれてきている。例を挙げればファクシミリ、留守番電話、ビデオ、また図書館の検索システムなどである。特に情報化を促進させた代表的なメディア、情報化社会の特徴的ともいえるメ

ディアをあげるとすれば、インターネット等の地球規模のネットワークであると私は考える。

インターネット、それは様々なコンピューターネットワークの集まりである。インターネット上では作成したホームページを公開することにより誰もが世界中のネットワークにつながった人々に情報を発信することができ、またEメールといういわば現実世界の手紙にあたるもので、特定のまたは不特定多数の人々とコミュニケーションをとることが可能となっている。ファクシミリなどに代表される情報機器、またはコンピューター（パソコン）を利用したインターネットなどの新しいメディアはわれわれの日常生活に現在深く入り込み、新たな情報の獲得や発信、新しいコミュニケーションの形態を生み出しているのである。しかしその反面、情報機器、メディアの使用に関しての「能力」を持たない人々にとっては、これらの情報機器は無用の長物になってしまうという現実がある。そのようなメディアの使用に関しての能力が本論のテーマである「情報リテラシー」である。

情報格差（information gap）論の観点から考えると、情報リテラシーを持つということの一つの要因として、より高度の情報や知識を得ることができる情報富裕層と、情報・知識を得るための手段の一つである情報リテラシーを持たないために情報・知識を得られないという情報貧困層とに人々が分かれることとなる。2者間の格差が広がるという問題にこの情報リテラシーは深く関係してくるのである。

では情報リテラシーの向上にはどのような要因が関与しているのであろうか。リテラシーの場合、初期は一部の階層のみが持っていたが、のちに教育によって広い階層に広がっていった。それと同様に現在の段階ですでに教育が情報リテラシーの度合いに関係してきているのだあろうか。また情報リテラシーを高めるための教育がどれだけ実施されているのだろうか。

## 2 情報教育と情報リテラシー

学校における教育がリテラシーの場合と同様に、情報リテラシーにも深く関与してきているのか。まずここでは教育現場における情報教育の現状について

みていきたいと思う。公文俊平は1980年代のはじめに、コンピューターが学校に導入される以前に社会的にすでにかなり広く普及している日本のような国では、コンピューターそのものについての教育を学校で本格的に行う必要は特になく、コンピューターを日常生活で利用する上で、最低限度必要な基礎知識ならばいまの子供たちの多くは、学校で教わらなくてもすでに持っている。あるいは友達から簡単に教えてもらうことができるとした。またコンピューターの専門家を別にすれば、これからの情報化社会でコンピューターをプログラムするための言語などの専門知識を万人が持つことが、どこまで必要なのかということも述べている。この学校における情報教育不要論は現在の状況を見てわかるように政府、学校関係者などには受け入れられていない。たしかにプログラミングなどの技術はすでに一般のレベルでは学ぶ必要性はないであろう。しかしただ友人に教わったりするのみで、情報リテラシーが十分発達するという考えは現在では一般的でない。単なる機器使用能力の育成ではなく機器を使用した情報の発信能力、情報に対する意識など、情報社会で必要な力は公文氏が考えているよりも広範囲に及んできていることも、情報教育の必要性を高めているのである。

では現在の情報教育はどのような状況になっているのか。国が情報教育を推進するにあたり情報リテラシー（実際には情報活用能力という概念を使用していた）という概念を持ち出したのは臨時教育審議会の第二次答申（1986年4月）においてであった。この教育改革に関する第二次答申においては「学校教育への各種の情報手段の活用を進め、児童・生徒の発達段階に応じた情報活用能力の育成を図ることの重要性をかんがみ、教員に対する情報教育のための研修を拡充すること」と述べられており、この時点で情報教育の重要性をとнаえ、教員の情報教育のための研修について言及している。

この臨教審の答申の後、情報化社会における教育制度の模索と改革が進められてきた。近いところでは1997年6月に文部省の第15期中央教育審議会の第二次答申が発表され、この答申等を基礎に教育改革のプログラムが制定されている。またこの審議会の第一次答申（1996年7月）においては生徒の情報リテラシーの向上のために教育用のパソコンの設置の充実とインターネット環境の早急な整備などが提言され、実行に移されていった。このように政府による情報

インフラ整備が現在行われている。一方教育課程はどうなっているのだろうか。文部省の専門家会議の第一次答申（1997年10月）において、小学校段階から情報教育を体系的に取り入れることが重要であるとして2003年に始まる次期教育課程で教科を超えて新設される「総合学習」の時間にコンピュータ操作を学ばせることを盛り込み、中学校でも技術・家庭科で情報教育を必修とすることなどを提言している。このことを総合して考えると情報教育は授業カリキュラムの点で現時点ではまだ未成熟の段階といえよう。またそれは情報リテラシーの教育をおこなう教師の育成の点でもまったく同じことがいえる。教師の採用試験に情報教育に関するものを盛り込むことを検討しているものの、それもまだ実現はしていないという現状である。

しかし現場においてはこのようなカリキュラムを独自で作成し実行している学校も多くある。具体的には木原俊行の事例研究において取り上げられている滋賀大学教育学部附属中学校などをあげることができよう。この滋賀大学教育学部附属中学校は昭和58年から総合的な学習のカリキュラム開発に着手している。それは「びわ湖学習」という郷土を学習することからはじまり、その一環として情報教育用プログラムが開発されてきた。

このようにすでに国に先行して情報教育を行っている学校は全国に多数存在し、情報リテラシーの育成をめざし始動しているようである。無論これについては既述の政府によるインフラ整備による後押しが追い風となっているであろう。

以上、情報教育に関して見てきた。それを踏まえ、ここで情報リテラシーと情報教育の関係性を考え、調査にむけて仮説を立てた。

#### ○情報リテラシーと情報教育の関係についての仮説

情報リテラシーと今までに受けた、そして現在受けている情報教育（そのなかではインフラ、教員、カリキュラムという要素がある）との間に関係性が存在する。

情報教育を受けてきた人が情報リテラシーが高く、情報教育を受けてきていない人が情報リテラシーが低くなる。

以上の仮説に基づき項目をたて調査を行った。(実際の調査においては教育の他にも項目をたて、情報リテラシーとの関連を考察しているが、今回は教育に関する部分のみを抜粋している。)

### 3 「大学生の情報生活に関する調査」について

#### 調査目的、調査対象

本調査は1998年9月から10月にかけて「大学生の情報生活に関する調査」というタイトルのもとで実施した。この調査の目的は大学生の情報リテラシーの度を調べ、いかなる要因がそれと関係しているかということを明らかにすることにある。

本調査における対象は大学生であり、その中でも社会学系の学部 of 学生とした。対象の設定は情報教育をもっとも受けてきた世代で、また同じ環境にあり人数的に近い男女構成であり、友達との交流など周囲の人とのコミュニケーションが比較的活発であるということを重視した結果、大学生とした。

調査はいずれも関西の四年制大学であるA、B、C、Dの計四つの大学の社会学系の学部で行った。

調査票は四つの大学の合計で1,177枚配布し、自己記入法で回答していただき、直接その場で回収したものである。回収した数は計868枚で回収率は74%となった。なおサンプリングは行わずランダムに配布した。

#### ① 情報リテラシーを得点化するための質問の設定

まず情報リテラシーを測定するための質問の設定であるが、これは合計15問用意した。

はじめに、情報リテラシーの中でもパソコンに関する部分を除いた、いわゆる周辺リテラシーについての質問を設定した。ここには情報に対する意欲等も含める。

#### 周辺リテラシーに関する質問の設定

質問A、定期的に雑誌を読みますか。

質問B, 欲しい情報はお金を払ってでも入手するのが当然だと思いますか。

この質問Aと質問Bは情報に対する意欲を見るための設問である。

質問C, ビデオの番組予約を自分でできますか。

質問D, 金融機関のATM(現金自動受け払い機)を使用してお金の出し入れ, 振り込みなどができますか。

質問E, キャッシュカード等の暗証番号を他人にわからないように工夫していますか。

質問F, 留守番電話の留守録の設定と再生ができますか。

質問G, ファクシミリで書類等の送信ができますか。

質問H, 図書館で欲しい本を端末を使って検索ができますか。

質問C, D, F, G, Hはパソコン以外の周辺的な情報機器の利用能力に関する設問である。また質問Eは情報化社会において意識していなければならない問題である, 個人の情報の重要性の理解に関する質問である。

その次にコンピューター・リテラシーに関する質問を設定した。

質問I, 無理なくキーボードで入力できますか。

これは情報化社会でこれから中心的な存在となるパソコンの使用に際し一番重要であり壁ともなっているキーボードについての質問である。日本人はもともとタイプをするという習慣がなかったため, 特にこの質問は重要であると考ええる。

質問J, パソコンを使って文章を作成できますか。

質問K, パソコンを使ってグラフを作成できますか。

質問JとKではパソコンを使用し実際に何ができているかということを聞く。その代表として文章の作成, グラフの作成をあげた。

質問L, ソフトウェアをコピーして使ったことがありますか。

この質問Lでは情報化社会において重要な問題である「著作権の保護」について聞く。著作権のあるソフトウェアは無断でコピーし(複製を作って)使用してはならないのである。

質問M, インターネットを利用したことがありますか。

質問N, 電子メールを送ったことがありますか。

質問O, 自分のホームページを作成し情報を発信したことがありますか。

質問MからOはパソコンなどの機器を使ったネットワーク、インターネットに関する質問である。ここではメールを利用したコミュニケーションや情報の発信能力を知るためにホームページ作成経験の有無を聞いている。

以上の15問を1問につき「はい」を1点として計算を行い、合計点を情報リテラシーの具体的な度合として考えることとする。高ければ高いほど情報リテラシーが高いということである。ただしLの「ソフトウェアをコピーして使ったことがありますか」に関しては「いいえ」を1点としている。

## ② 情報教育に関する質問の設定

情報教育に関する質問は以下の通りである。

情報教育の中心的な課題であるパソコンの使用方法について、学校で学んだかどうかを聞くために次の質問を設定した。

質問1、今までにどのような形でパソコンの使用方法を学習してきましたか。当てはまるところに○をしてください。

学校、学校以外（カルチャースクールなど）、独学

そして学校と答えた人に対しては

質問2、パソコンの使用方法はどの学校で学びましたか。当てはまるもの全てを選んで○をして下さい。

幼稚園、小学校、中学校、高等学校、専門学校、短期大学、大学、その他という質問を設定しどの時点で学んでいるかということを確認した。情報教育が高校までは（カリキュラムの面において）全国的な統一のもとで実行されていないことはすでに述べたが、独自のカリキュラムで行っている情報教育を受けてきた人がどの程度いるかをみるための質問である。

質問3、専門科目の授業でパソコンを使用する授業を受けたことがありますか

この質問では社会学系の学部において、どの程度講義でパソコンを使うことがあり、またその講義が学生により受講されているのかということを聞く。

質問4、情報機器の使用方法を尋ねることができるのは誰ですか。

この質問で大学の教員を選択肢の一つとする。大学の教員の情報リテラシーが養成されており、学生に対し指導がなされていればこの質問に対し回答者は

大学の教員を選ぶと考えた。

質問5, どんな人とメールのやり取りをしますか。

この質問の選択肢にも大学の教員を含めた。情報リテラシーのなかでもパソコンを使ったコミュニケーションをするためには必ず相手がいる。その相手としての役割を大学の教員が果たしているかどうかをみるための質問である。

質問6, あなたの大学にあなたが自由に使用できるパソコンがありますか。

この質問では大学の設備の問題, つまりインフラの問題を聞く。これは第二章でも述べたように情報教育にはインフラが必要であるという理由からである。

#### 4 調査結果にみる情報リテラシーと情報教育の関係

情報リテラシーに情報教育が実際どのように関係しているかを見ていく。まず基準となる情報リテラシーの得点化の結果を見る。

情報リテラシーの平均点は8.53点(15点満点)となった。これは郵政省調査の日本の平均である8.29点より0.26点高く, アメリカ合衆国の平均の8.97点と比べると0.42点低い結果となった。また本調査における情報リテラシーの得点の最多層は8~11点となった。これは郵政省の調査における日本の7~10点よりも高得点者が多くなっていたが, アメリカ合衆国の最多層10~13点と比較すると低い状況にあるといえる。

(周辺リテラシーは8点満点で平均点が5.7点), コンピューター・リテラシーは7点満点で平均点が2.7点となった。)

##### 情報教育に関する項目の結果

現在大学生の中心である18歳から22歳の人は年齢的に情報教育の重要性が唱えられはじめ, 情報教育が端緒についた時期に中学, 高校時代などを過ごしている世代である。

質問1, 2でパソコン使用を学校において学んだことがある人は533名(61.4%)であり学んだことがないという人の290名(33.4%)を大きく上回った。学んだことのある人の内訳は複数回答であるが幼稚園が2名, 小学校が15名, 中学校が247名, 高等学校が141名, 大学が395名である。中学校からパソコン



に触れている人が多くなり、大学においてパソコンの使用方法を学んだことがある人がもっとも多くなるという結果となった。教育改革により情報教育が始められてはいるが、依然カリキュラム、教えることができる教員数の不足等の問題によりすべての中学校、高校までには情報教育がいきわたっていない状況が現れているといえよう。また大学においてが395名と多くなったが、これは大学においてコンピュータールームを多く設置していくといった設備面での整備が進んでいることや、社会学系の学部であるということから、社会調査の講義、情報処理の講義などによりパソコンの使用方法を教わる機会が中学校、高等学校に比べカリキュラムに盛り込まれやすいということと関係があると思われる。

質問3「専門科目の授業でパソコンを使用する授業を受けたことがありますか」という質問にあると答えた人は347名(39.9%)となっている。

実際にはそのような講義は存在するのであるが、高校などと比べ専門科目においても比較的自由に講義の選択ができるということがこの結果に表れているのであろう。

質問4「情報機器の使用方法を尋ねることができるのは誰ですか。」では43名(4.9%)が大学の教員と答えた。この低さは大学教員の情報リテラシーの低さであるとともに大学側の情報教育への対応の後れとも捉えることができる。

質問5「どんな人とメールのやり取りをしますか」で大学の教官を20名(2.3%)が選んだ。授業における質問をメールで受け付けるなどしている教官を想定していたが予想以上に低い結果となった。

質問6「あなたの大学にあなたが自由に使用できるパソコンがありますか」という質問では436名(50.2%)があると答えた。調査を行ったすべての大学にコンピューターを自由に使用できる環境があるわけであるが、その規模が学生数と比べて少ないと学生が感じていたり、コンピュータールームの存在を知らないといったことにより100%とはならなかったのであろう。

次に得点化した情報リテラシーと情報教育の関係を見てみる。

まず情報教育の中心的なものとして考えられるパソコンの使用方法に関する質問1について考える。

使用方法を学んだ人の情報リテラシーの得点の平均点は9.1点、使用方法を学んだことがない人の情報リテラシーの得点の平均点は8.2点となった。このように平均点から見れば使用方法を学校における情報教育により学ぶということが情報リテラシーに影響を及ぼしているといえる。

パソコンの使用方法を学校で学んだことのある人の最多層は9点から11点であり、またパソコンの使用方法を学校で学んだことのない人は得点が広く分布しているがこれは独学でパソコンの使用方法を学んだ人が入っているためで高得点部分に独学が、低い部分に学んだことがない人が多く分布していると推測できる。

独学の人の情報リテラシーを見ると、その平均は9.2点となり学校で情報教育を学んだという人の情報リテラシーの得点の平均点をわずかに上回り、ほとんど同じ得点となった。(有意な差ではない。)つまりまったくパソコンの使用方法を学んだことがない人が先ほどの平均点を下げていたというわけである。これは個別に確認するまでもなくコンピューターリテラシーに関する得点が低いためであると考えられる。

このようにパソコンの使用方法を学校で学んだ人も、独学で学んだ人も同程度の情報リテラシーを持つという結果となった。これは情報リテラシーに対して学校教育の効果が現れていないということであろうか。そう結論づける前に、その内容まで同じなのか、なにか異なる傾向がないか考えてみる。

パソコンの具体的な操作能力を問う質問I「無理なくキーボードで入力できますか」において、「はい」と答えた人は学校で学んだ人225名で(42.2%)、独学の人138名で(61.8%)大きくその差が出ている。

また質問Mでインターネットの利用を見てみると学校で学んだ人は315名(59.0%)、独学が137名(61.1%)となり有意な差はない。

質問L「ソフトウェアをコピーして使ったことがありますか」という質問では、学校で学んだ人で、あると答えた人が74名(13.8%)、独学は75名(33.4%)とこれにも有意な差が出ている。

また「パソコンを使えないと取り残されると思いますか」という質問では学校で学んだ人で、思うと答えた人が400名(75.0%)、独学が144名(64.2%)となりここでも有意な差が出ている。周辺的な機器の使用能力を問う質問の一

つを見てみると質問G「ファクシミリで書類等の送信ができますか」で、学校で学んだ人はできるが282名（32.4%）、独学が136名（60.7%）となり有意な差が出ている。

このように分析すると、同程度の情報リテラシーでもその内容はかなり違っている。キーボードにより慣れているのは独学の人であり、また周辺的な機器の使用においても独学の人の方が能力を持っている割合が高い。また独学の人には自分でパソコンに触れる環境を持っている（パソコンの所有率は57.5%となっており、学校で学んだ人の28.7%に比べ高い割合となっている）。独学の人には学校で学ぶ機会がなくとも、パソコンを使用してやりたいこと、やらなければならないこと（勉強や遊びなどと考えられる）があるため自分から熱心に使用方法を学びパソコンを購入する。そのため質問Iのような情報リテラシーの得点が高くなったのではないだろうか。また自分からパソコンに引き付けられその使用方法を自ら学んでいくタイプの人は、もともと周辺的な情報機器を使いこなしたりすることが得意な、いわゆる「情報機器に対する抵抗が少ない」傾向にあることも質問Gとの関係からわかる。

だが質問Jで著作権に対する意識が低かったという結果となっている。このような情報リテラシーは学校で情報教育を受けた人のほうが高い結果となっているのも興味深いことである。

以上のように独学で学んでいる人も十分全体的には同程度の情報リテラシーを持っていると言うことができるので、現段階ではまだ情報教育の明確な関係を確認することはできなかった。しかし、このことから単純に情報教育が必要でないとか、情報教育が情報リテラシーとまったく関係がないとすることはできない。内容を見ると、単なるコンピューターの操作能力は独学の人の方が高いが、情報社会で守らなければならない著作権の理解などに難があるという結果も出ているのである。情報教育の目的、効果はそのような項目にも及ぶものであると考えられる。

質問3「専門科目の授業でパソコンを使用した」と情報リテラシーの関係  
使用した人の情報リテラシーの得点の平均点は10.3点、使用していない人は7.7点となった。

コンピューターリテラシーとの関係を見てみても使用した人の平均点は4.1点、使用していない人の平均点は2.0点となった。このような有意な差が存在するということで、この項目においては情報リテラシーと関係があるといえるだろう。

#### 質問4「情報機器の使用方法を大学教員に尋ねることができる」と情報リテラシーの関係

人数の差がつきすぎたが（以下の質問5も同様である。）「はい」とした人の情報リテラシーの得点の平均点は10.2点、「いいえ」とした人の情報リテラシーの得点の平均点は8.6点となり顕著な差が見受けられた。

#### 質問5「大学教員とメールのやり取りをしますか」と情報リテラシーの関係

やり取りをすると答えた人の情報リテラシーの得点の平均は10.9点、やり取りをしない人の情報リテラシーの得点の平均点は8.6点という結果となった。この差は情報リテラシーの中のコンピューター・リテラシーに関しても確認することができた。

#### 質問6「あなたの大学にあなたが自由に使用できるパソコンがありますか」と情報リテラシーの関係

「ある」と答えた人の情報リテラシーの得点の平均は10.1点、「ない」と答えた人の情報リテラシーの得点の平均は7.2点となり有意な差が出たといえるだろう。また情報リテラシーの中のコンピューター・リテラシーとの関係を見てみると、コンピューター・リテラシーの得点の平均点も「ある」と答えた人は4.0点、「ない」と答えた人は0.47点と大きく差が出ており、明らかに「ある」と答えた人のコンピューター・リテラシーが高くなっている。またパソコンを所有している人は情報リテラシーの度合いが高いという結果も別に出ており、パソコンの所有、または使える環境があるということも当然ではあるが情報リテラシーを高めるということが分かった。

以上質問3から質問6まで、情報リテラシーとの関係をみた。質問1と2においてはよく関連性が出ていないが、ここではいずれの質問でも情報教育に関係する方に「はい」、「ある」と答えた人が情報リテラシーの得点が高いという傾向となった。これにより、情報リテラシーと情報教育には関係性が存在するという仮説が、ここにおいては成り立つといえる。

## 5 情報リテラシーと情報教育のこれから

これから情報リテラシー、情報教育に関して研究を進めていく上で、とくに注目したいのが倫理に関するものである。調査においては著作権についての質問項目を設けたが、それが倫理に関するものであると言えるだろう。結果として著作権に関する問題については情報教育の成果が出ていた。しかし最近の携帯電話の普及により、ソフトの違法コピー等の著作権の問題だけではなく、出会い系サイトの問題なども出てきている。さまざまな面で情報倫理の重要性が増してきているのである。そのような現状であるため、教育機関における情報教育は、情報倫理を含めた総合的な情報リテラシーの育成に焦点を当てて、進めていく必要がより一層出てきていると考えられる。特にすでに独学である程度パソコンと使いこなしている人に対しては「情報倫理」に関する部分で成果をあげていないことが調査からわかっている。倫理的に許されない行為、または違法行為を冗長するツール等はインターネット上に数多くある。情報倫理に関する情報リテラシーを持たない人にとっては、危険な状況にあるといえるのである。単なる機器の使用能力は情報機器の発達によりそれ程求められなくなる可能性がある。これからの情報教育にとって重要なのは、使用能力だけではなく、情報社会における大切な事柄、例えばその一つである情報倫理の育成となっていくと考えられる。

しかし残念ながら情報倫理の育成に関して情報教育は、十分にその役割を果たしているとは言えない。情報倫理の育成の面では常に後手に回っているのである。なぜなら非常に速いスピードで情報機器等が進歩し、それに合わせて新しい問題がすぐに生まれて来てしまうためである。出会い系サイトの問題に情報教育が効果を上げているだろうか。すばやく柔軟に、現状に対応する情報教

育がより求められていくであろう。調査においてはあまり情報倫理に関して取り上げることができなかったが、今後の研究においてはこのような情報倫理、またその教育についてより深く考察していきたいと思う。

#### 文献

- 1 『メディアコミュニケーション—情報交流の社会学—』 川崎賢一 他 富士通ブックス 1994年
- 2 『情報化の中の〈私〉』 守弘仁志・岩佐淳一・大野哲夫・小谷 敏・城戸 秀之・早川洋行・新井 克弥著 福村出版 1996年
- 3 『平成10年版 通信白書』 郵政省編 大蔵省印刷局発行 1998年
- 4 『マスコミを学ぶ人のために』 早川善治郎・津金澤聡廣編 世界思想社 1978年
- 5 『現代のエスプリ』 370号 1998年
- 6 『コミュニケーションの科学—マルチメディア社会の基礎理論』 E・M ロジャーズ著 共立出版 1992年
- 7 『情報化の中の〈私〉』 守弘仁志他著 福村出版 1996年
- 8 『メディア時代の文化社会学』 吉見俊也著 新曜社 1994年
- 9 『メディアと情報化の社会学』 井上 俊他編 岩波書店 1996年
- 10 『《情報》の社会学』 小林修一・加藤晴明著 福村出版 1994年
- 11 『ネットワーク社会』 公文俊平著 中央公論社 1988年
- 12 『変わるメディアと教育のありかた』 水越敏行、佐伯胖著 ミネルヴァ書房 1996年
- 13 『高校教育基本資料集 通知・通達編』 月刊高等教育編集部編 学事出版 1997年
- 14 『情報化白書 1998』 日本情報処理開発協会編 コンピュータエージ社 1998年
- 15 『情報教育の普及と発展を支えるシステムの検討』 研究代表者 水越敏行 1998年
- 16 『ネットワーキング・コミュニティ』 池田謙一編 東京大学出版 1997年
- 17 『変わる社会とメディア生活』 児島和人、橋元良明編 ミネルヴァ書房 1996年
- 18 『平成10年版 通信白書』 郵政省編 大蔵省印刷局 1998年

## 資料

調査項目（情報リテラシーと情報教育に関する項目のみ抜粋）

- Q09 定期的に雑誌を読みますか
- Q10 定期的に雑誌を買っていますか
- Q11 欲しい情報はお金を払ってでも入手するのが当然だと思いますか
- Q12 人よりも早く情報を得たいと思いますか
- Q13 情報はできるだけ多く入手したいと思いますか
- Q14 身近に情報機器(例：ビデオ，FAX，パソコンなど)の使用方法を尋ねる事ができる人はいますか
- Q15 情報機器の使用方法を尋ねることができるのは誰ですか。
- Q16 ビデオの番組予約をご自分でできますか
- Q17 金融機関のATM（現金自動受け払い機）を使用してお金の出し入れ，振り込みなどができますか
- Q18 キャッシュカード等の暗証番号を他人に分からないように工夫していますか
- Q19 留守番電話の留守録の設定と再生ができますか
- Q20 ファクシミリで書類等の送信ができますか
- Q21 オーディオ機器（ウォークマン，コンポなど）を持っていますか
- Q22 携帯電話・PHS・ポケベルを持っていますか
- Q23 家庭用ゲーム機（ファミコンなど）を持っていますか
- Q24 図書館で欲しい本を端末を使って検索ができますか
- ＜パソコンの使用に関して＞
- Q25 あなたにはパソコンの話題を話せる人が何人いますか
- Q26 パソコンの話題を話せる人は誰ですか。
- Q27 あなたはパソコンに対してどのように思いますか。当てはまるところに○をして下さい。
- Q27-1 パソコンの操作は難しい Q27-2 パソコンは役立つもの Q27-3 パソコンは便利である Q27-4 パソコンは楽しい Q27-5 パソコンを使いたい

Q28 無理なくキーボードで入力できますか。

Q29 レポートをパソコンで作成しますか。

Q30 パソコンを使えないと取り残されると思いますか

Q31 あなたは今までどのような形でパソコンの使用方法を学習してきましたか。

Q32 パソコンの使用方法はどの学校で学びましたか。

Q33 あなたのパソコン使用歴

Q34 今までパソコンを利用してどういう事をしましたか。当てはまるもの全てを選んで○をして下さい。

(01) 文章の作成 (02) グラフ作成 (03) 表計算 (04) メール (05) インターネット (06) パソコン通信 (07) ゲームで遊ぶ (08) 絵や音楽を楽しむ (09) 統計処理 (10) プログラミング (11) その他 (12) 特になし

Q35 パソコンを週平均、何時間利用していますか。

Q36 パソコンを利用してこれからやりたい事がありますか。

(01) 文章の作成 (02) グラフ作成 (03) 表計算 (04) メール (05) インターネット (06) パソコン通信 (07) ゲームで遊ぶ (08) 絵や音楽を楽しむ (09) 統計処理 (10) プログラミング (11) その他 (12) 特になし

Q37 ご自分のパソコンをお持ちですか

Q38 あなたの主に使っているパソコンは次のうちどれですか。当てはまるものを選んで○をして下さい。

(1) デスクトップ型パソコン (2) ノート型パソコン

Q39 その種類は次のうちどれですか。当てはまるものに○をして下さい。

(1) DOS/V機 (WINDOWS, DOS) (2) マッキントッシュ (3) NEC PC98 シリーズ (4) その他 (5) わからない

Q42 あなたの大学にあなたが自由に使用できるパソコンがありますか

Q43 専門科目の授業でパソコンを使用する授業を受けた事がありますか

Q44 ソフトウェアをコピーして使ったことがありますか

<インターネットの利用に関して>

Q45 あなたはメールアドレスを持っていますか。

Q46 インターネットを利用したことがありますか

Q47 どこでインターネットを利用していますか。



(1) 大学でインターネットを利用している (2) 自宅 でインターネットを利用している (3) その他 (4) 利用していない

Q48 それぞれの場所でインターネットを一週間平均何時間利用していますか。

Q49 今までインターネットを一週間で最大何時間利用した事がありますか。

Q50 あなたはインターネットをどのように利用していますか。

(01) メール (02) ネットサーフィン (03) 電子掲示板での情報交換 (04) 自分のホームページをつくり情報を発信する (05) オンラインショッピング (06) 検索エンジンを利用した情報検索 (07) 有料の情報提供サービスの利用 (08) チャット (09) その他

Q51 メールは一週間に平均何通送信しますか、また何通受信しますか。

Q52 どんな人とメールのやり取りをしますか。

Q53 通信費(電話代, プロバイダーの費用等)は一ヶ月平均およそいくらですか。

Q54 今まで通信費が一番多かったときには、一ヶ月でいくらかかりましたか

(とみかわたく 佛教大学大学院社会学研究科修士課程修了)